

I 2015年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015年度大学評価結果総評】

スポーツ研究センターでは、これまでの自己点検・評価活動に対して、実現可能な目標に修正した上での確に事業を推進し、真摯に取り組んでいることがうかがわれ、この点は高く評価できる。今後は、内部質保証委員を拡充しながら、第三者評価も考慮し、チェック機能がよりよく働く仕組みを構築することを期待したい。さらに、このような実現可能な目標の設定と着実な実施を継続するとともに、社会的には、2020年度のオリンピック・パラリンピックを控え、本領域に対する関係者・一般市民の関心が高まっていることから、外部資金の獲得等によって、よりその存在感が高められるよう、今後の社会的役割の向上にも期待したい。

【2015年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400字程度まで）

昨年度の評価において「外部資金の獲得等によって、よりその存在感が高められる」ことを期待する旨のコメントを受けた。そこで昨年度の科学研究費補助金の申請においては、センター所員が合同で申請する試みを実施した。また、「今後の社会的役割の向上にも期待したい」との助言に対し、2020年のオリンピック・パラリンピックを見据えながら、本学体育会活動に対する積極的な情報提供・科学的サポート等の継続的な支援を今年度より新たに実施する予定である。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2016年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2015年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2015年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

2016年2月25日、市ヶ谷キャンパスボナソワードタワー26Fスカイホールに於いて、公開講座「オリンピックとメディア」を開催した。参加者は法政二中高、法政女子高、千代田区内の高校生、体育会、社会学部生、スポーツ健康学部生、自主マスコミ研究会、学者者など約80名。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2015年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。

- ・伊藤マモル

学会発表：「メンターの存在は大学生競技者を幸せにする—スポーツ・ライフ・バランスの実現に向けて」日本細菌学会（2016年3月）

- ・荒井弘和

論文「Expected qualifications for external coaches in school-based extracurricular sports activities.」Journal of Educational and Social Research, 5, 53-60 (2015年)

論文「The relationship between obtaining fecal occult blood test and beliefs regarding testing among Japanese.」Health Psychology and Behavioral Medicine, 3, 251-262. (2015年)

論文「Potential external coaches' perceptions of facilitators and barriers for engaging in school-based extracurricular sports activities.」International Journal of Coaching Science, 10, 65-79. (2016年)

論文「中高年期・高齢期を対象とした夫婦関係における効力感と主観的幸福感との関連」老年精神医学雑誌, 27, (2016年)

論文「スポーツチームにおける「問題児」とのコミュニケーション」法政大学スポーツ研究センター紀要, 34, 11-15. (2016年)

論文「集団で楽しむエンターテイメントへの参加行動の変容ステージと参加に関する意志決定のバランスとの関連」法政大学スポーツ研究センター紀要, 34, 17-23. (2016年)

- 論文「ボート競技における艇のパフォーマンス向上のための声かけ方略」法政大学スポーツ研究センター紀要, 34, 25-33. (2016年)
- 論文「走運動における強度設定方法の相違が感情変化に与える影響」法政大学スポーツ研究センター紀要, 34, 35-39. (2016年)
- 論文「親が子どものスポーツ活動に参加することと地域におけるソーシャル・キャピタルとの関連—NPO 法人川崎市法政トマホークス倶楽部の事例—」地域イノベーション, 8, 47-59. (2016年)
- 論文「大学生を対象としたお土産購入に関連する要因の検討」地域イノベーション, 8, 61-73 (2016年)
- 学会発表:「メンターの存在は大学生競技者を幸せにする—スポーツ・ライフ・バランスの実現に向けて」日本体育学会 66 回大会 (2015年8月)
- 学会発表:「交際相手のいる大学生競技者は幸せか?—スポーツ・ライフ・バランスの実現に向けて—」日本健康心理学会 第 28 回大会 (2015年9月)
- 学会発表:「大学生競技者を支えるメンタリングとは?—スポーツ・ライフ・バランスの実現に向けて—」日本スポーツ心理学会 42 回大会 (2015年11月)
- ・林容市

学会発表「青年期の垂直跳びにおける調整力と各就 学年代の運動量との関係」日本体育測定評価学会 (2016年2月)
 - ・山田快

論文「女子バレーボールにおける攻撃パターンについての研究」法政大学スポーツ研究センター紀要, 34, 5-10. (2016年3月)

論文「大学生における自身の体力に対する評価と運動実施に対する価値観並びに要求が定期的スポーツ実施の意思に及ぼす影響」法政大学スポーツ研究センター紀要, 34, 41-50. (2016年3月)
 - ・中澤史

論文「スポーツ演習による受講生の社会的スキル向上効果に関する検討」法政大学スポーツ研究センター紀要, 34, 1-4 (2016年3月)
 - ・吉田康伸

論文「女子バレーボールにおける攻撃パターンについての研究」法政大学スポーツ研究センター紀要, 34, 5-10. (2016年3月)

学会発表「スポーツ演習による受講生の社会的スキル向上効果に関する一考察—開講学期および性別に着目して—」日本体育学会 第 66 回大会 (2015年8月)

話題提供「エゴグラムを用いたアスリート理解と心理支援」第 44 回日本交流分析学会中央研修会 2016 春 (2016年2月)
 - ・越智英輔

論文「Importance of both fatness and aerobic fitness on metabolic syndrome risk in Japanese children.」PLoS ONE, 10(5), e0127400 (2015年6月)

論文「Relationship between performance test and body composition/physical strength characteristic in sprint canoe and kayak paddlers」Open Access Journal of Sports Medicine, 6, 191-197 (2015年6月)

論文「Activation of AMP-activated protein kinase induces expression of FoxO1, FoxO3, and myostatin after exercise-induced muscle damage.」Biochemical and Biophysical Research Communications, 466(3), 289-294 (2015年8月)

論文「Differences of activation pattern and damage in elbow flexor muscle after isokinetic eccentric contractions.」Isokinetics and Exercise Science, 23(3), 169-175 (2015年8月)

論文「Repeated bouts of fast velocity eccentric contractions induce atrophy of gastrocnemius muscle in rats.」Journal of Muscle Research and Cell Motility, 36(4-5), 317-27 (2015年10月)

論文「小学校高学年における運動習慣・睡眠の重要性」, 運動とスポーツの科学, 21(1), 13-20 (2015年12月)

論文「Effects of combined β -hydroxy- β -methylbutyrate (HMB) and whey protein ingestion on symptoms of eccentric exercise-induced muscle damage」Journal of the International Society of Sports Nutrition, 13(7) (2016年2月)

論文「Increases in M-wave latency of biceps brachii after elbow flexor eccentric contractions in women」European Journal of Applied Physiology, 116(5), 939-46 (2016年3月)
 - ・神和住純

論文「テニス競技力向上とテニスにおける生涯スポーツと健康について」法政大学スポーツ健康学研究, 7, 45-61 (2016年3月)

- 永木耕介
 - 論文「柔道選手における心理的スキルの様相：柔道選手が重視する練習形態・方法からの検討」武道学研究, 48 (1), 1-10 (2015年9月)
 - 論文「An Examination of Judo Practitioners' Aggression and Knowledge about the Purpose of Judo」日本スポーツ教育学会第35回記念国際大会プロシーディング, 111 (2015年9月)
 - 学会発表「「柔の原理」体感をねらいとした柔道指導法の研究-回る動きの学習-」日本体育学会第66回大会・体育科教育学専門領域 (2015年8月)
- 山本浩
 - 著作「スポーツアナウンサー～実況の真髄～」岩波書店 (2015年10月)
 - 論文「スポーツ界にジャーナリズムは必要」NPO放送批評懇談会 GALAC, 221, 18-19(2015年9月)
- 泉重樹
 - 論文「スポーツ鍼灸委員会の取り組み スポーツ疾患に対する鍼灸のエビデンス」全日本鍼灸学会雑誌, 65(4), 271-272, (2015年)
 - 論文「米国 Boise State University アメリカンフットボールチームにおけるスポーツ鍼灸の経験」全日本鍼灸学会雑誌, 65(4), 265-70, (2015年)
 - 論文「現在の米国の鍼治療の一例」医道の日本, 74(8), 152-159, (2015年)
 - 論文「アスレティックリハビリテーションと鍼灸治療—体幹の機能評価を中心として 3」トレーニングジャーナル, 37(1), 43-50 (2015年)
 - 論文「スポーツ鍼灸委員会の取り組み スポーツに鍼灸ムーブメントを起こすために」全日本鍼灸学会雑誌, 65(2), 107-108 (2015年5月)
 - 論文「スポーツ鍼灸委員会の取り組み 第64回全日本鍼灸学会学術大会を終えて」全日本鍼灸学会雑誌, 65(3), 203-204 (2015年8月)
 - 論文「What did I learn in Boise? A 2014 sabbatical report」Bulletin of Sports and Health Studies Hosei University, 6, 23-29 (2015年9月)
 - 学会発表「刺鍼時の感覚表現と刺鍼時の強度および快不快感との関連の検討 第二報」第64回全日本鍼灸学会 学術大会 (2015年5月)
 - 学会発表「腰痛を有するスポーツ選手に対する鍼治療に関する文献レビュー」第64回全日本鍼灸学会 学術大会 (2015年5月)
 - 学会発表「米国におけるスポーツ鍼灸の経験 Boise State University での活動」第64回全日本鍼灸学会 学術大会 (2015年5月)
 - 学会発表「Effectiveness of 4-week loaded movement or body weight training in improving the thickness of the deep and superficial abdominal muscles in collegiate students.」European College of Sports Science (2015年6月)
 - 学会発表「米国におけるアスレティックトレーナー教育の経験： Boise State University, Athletic Training Program の例」第4回日本アスレティックトレーニング学会学術集会 (2015年7月)
 - 学会発表「大学ラグビー選手のアスレティックリハビリテーション・コンディショニングに鍼灸を用いた例」埼玉県アスレチック・リハビリテーション研究会 (2015年10月)
 - 学会発表「Effects of Acupuncture Treatment on Sports Injury of Collegiate Athletes in Japan.」Society for Acupuncture Research. (2015年11月)
 - 学会発表「バイオメカニクスの観点から見た腰痛に対する鍼灸のアプローチ」関東鍼灸学会(2015年11月)
 - 学会発表「サッカー選手の経験年数による股関節外転筋力・内転筋力の検討.」体力科学, 64(6), 658, (2015年12月)
 - 講演「米国アスレティックトレーナー教育の経験—Boise State University を例にして—」筑波大学スポーツアソシエーションセミナー (2015年4月)
 - 講演「米国アスレティックトレーナー教育の経験—Boise State University の例—」静岡県アスレティックトレーナー協議会講演 (2015年5月)
 - 講演「ボクシング選手のトレーニングとコンディショニングの注意点」千葉県ボクシング連盟指導者講習会 (2015年8月)
 - 講演「米国におけるスポーツ鍼灸の実践—Boise State University での鍼灸治療を中心に—」臨床スポーツ鍼灸研究会セミナー (セイリン株式会社後援) (2015年9月)
- 林園子

<p>論文「法政大学スポーツ健康学部教職課程の現状と課題－「教育実習」と「保健体育科教育法」の評価に着目して」法政大学スポーツ健康学研究, 7, 21-29 (2016年3月)</p> <p>論文「小学生における身体活動量と体力向上の関係性」東京家政大学 研究紀要人文社会科学, 56(1) (2016年3月)</p> <p>学会発表「身体表現の教育と人間形成に関する研究(3)」日本体育学会第66回大会(2015年8月)</p> <p>・高見京太</p> <p>論文「本学学生の初年時における体格・体力について－2015年度体力・形態測定の結果－」法政大学スポーツ研究センター紀要, 34, 51-56 (2016年3月)</p> <p>学会発表「幼稚園児の体力水準を考慮した身体活動と遊びの関連性：横断研究」第70回日本体力医学会大会(2015年9月)</p> <p>学会発表「High-impact, low-repetition jump training is effective for preventing bone loss in postmenopausal regular swimmers.」Sports Medicine Australia(2015年10月)</p> <p>・杉本龍勇</p> <p>論文「大学生における自身の体力に対する評価と運動実施に対する価値観並びに要求が定期的スポーツ実施の意思に及ぼす影響」法政大学スポーツ研究センター紀要, 34, 51-56 (2016年3月)</p> <p>学会シンポジスト「オリンピックに向けた個人競技のブランディング」第8回日本スポーツマネジメント学会(2015年12月)</p> <p>監修「フィジカルトレーニング」footies! vol.29-vol.32 (2015年、2016年)</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>
<p>③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）</p> <p>※研究所の刊行物に対して2015年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や2015年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を箇条書きで記入。</p> <p>・荒井弘和：28件</p> <p>・泉重樹：2件</p> <p>・杉本龍勇：1件</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>
<p>④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）</p> <p>（～400字程度まで）※2015年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。</p> <p>各所員が個々で学会に所属して精力的に研究活動を行っており、学術論文や学会発表への評価を通じ、本センターに対する客観的評価も高まっていると推察している。また、本センター運営委員会と全所員参加のメール審議を通じてセンターの活動に対する自己点検評価を行うことにより、包括的・多角的な意見を踏まえた組織運営に勤しんでいる。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>
<p>⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況</p> <p>※2015年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および2015年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。</p> <p>「2015年度中に応募した科研費等外部資金」</p> <p>・2016（平成28）年度科研費：17件</p> <p>「2015年度中に採択を受けた科研費等外部資金」</p> <p>・2016（平成28）年度科研費 基礎研究C：1件（240万円）</p> <p>・科研費継続課題：6件</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・特になし

【この基準の大学評価】

<p>スポーツ研究センターでは教育・研究活動の一環として、2016年2月に市ヶ谷キャンパスのスカイホールで開催された公開講座「オリンピックとメディア」が学内外から多くの参加者を集め、スポーツ健康学分野に対する社会的な関心の高さを証明した。多くの所員の研究活動の成果は、論文や学会報告として対外的に公表され、また、その成果は社会的に評価されたものも多いことは高く評価される。また、これら研究活動を支える、科研費等の外部資金も獲得されている。ただ、組織評価に関しては、所員による自己点検・評価にとどまっていると思われ、他学部有識者や学外有識者による第三者評価組織を設置して、活動に関する客観的評価を受けることが、スポーツ研究センターの今後のさらなる発展につながるものとする。</p> <p>スポーツ研究センターのホームページが2015年10月6日を最後に更新がされておらず、兼担所員の一覧も2015年度のままとなっていたが2016年7月末までに当該ホームページの更新が予定され対応が見込まれる。ホームページは重要な対外的広報ツールであり、刷新も含め定期的な更新を行うよう改善が見込まれる。</p>
--

2 内部質保証

(1) 点検・評価項目における2015年度の現状

2.1 内部質保証システム(質保証委員会等)を適切に機能させているか。
①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。
<p>【2015年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。</p> <p>2015年度より、内規により原則として前所長が内部質保証委員を担当している。</p> <p>年間3回程度開催される運営委員会と全所員間のメール審議を通じ、全所員が参画して自己点検評価を行っている。</p>

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・2015年度より、内部質保証委員を内規により制定した。	

【この基準の大学評価】

<p>スポーツ研究センターでは年3回程度開催されている運営委員会と、メール審議を利用した全所員参加による自己点検・評価活動の実施、内部質保証委員会の内規制定、前所長の内部質保証委員担当など、内部質保証活動が進められていることは評価される。しかし、内部質保証委員会の組織、機能、活動方針などが不明確であり、学部、大学院とも連携しながら、内部質保証活動の整備強化を図りたい。内部質保証委員会の活動の活性化は、在学生・卒業生から高い評価を受けているスポーツ健康学教育・研究の内容を学内外に広く知らしめる契機となるものと思料する。</p>

【大学評価総評】

<p>スポーツ研究センターにおいては、2016年度には、継続課題を含めて計7件の科研費を獲得しているが、さらなる外部資金の獲得に向けて、センター所員が合同で科研費補助金の申請を行う試みを実施したことは高く評価され、継続した努力に期待したい。</p> <p>また、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、本学体育会活動に対する積極的な情報提供・科学的サポートなどの支援を本年度より新たに実施するとしており、具体的な成果に期待する。この際には、スポーツ・サイエンス・インスティテュート(SSI)の教育・研究に対する連携強化も視野に入れた取り組みを進めて欲しい。</p> <p>さらに、2015年10月にスポーツ庁が設立され、国としてのスポーツ振興策が強化されたことなど、本学のスポーツ健</p>
--

康学教育・研究を進める上で、追い風が吹いている社会情勢にある。

そのような情勢を積極的にとらえて、国のスポーツ政策との協調をも視野に入れつつ科研費等の公的な外部資金や、今後、拡大すると予想される民間研究資金の獲得に期待したい。スポーツ研究センターとしては、それらを有効に活用することで、スポーツ科学に関する調査・研究、スポーツ施設を利用した実践活動、地域に密着した社会貢献活動などの活性化を実現してほしい。

スポーツ研究センターの主たる目的は、「スポーツ科学の調査および研究」、「体育施設の運営に関する事項を実施すること」とあり、所員の研究活動促進およびサポートが主たる役割である。学部・大学院教育への関与は含まず、設置の目的および役割分担がスポーツ健康学部、スポーツ健康学研究科、スポーツ・サイエンス・インスティテュートとは明確に異なっているが、教育の目的、役割分担が外部からは分かり難い印象がある。今後は、より積極的にスポーツ研究センターの設置趣旨を踏まえた活動の促進、さらにはそれらの情報発信を促進して行く必要がある。また、学生のスポーツ活動、健康維持増進のための指導助言を行うために、相互が補完し合えるような連携を深めていくことも重要である。